



TITLE:

巻頭言 : 臨床教育学講座と変容

AUTHOR(S):

齋藤, 直子

CITATION:

齋藤, 直子. 巻頭言 : 臨床教育学講座と変容. 臨床教育人間学 2009, 9: 1-4

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197071>

RIGHT:

臨床教育学講座と変容

魂の前進は、直線の動きによって表されうるものとして、段階的になされるのではない。むしろ、メタモルフォーゼによって——卵から幼虫へ、幼虫から羽根のある昆虫へと——表わされうるものとして、状態の向上によってなされる。偉才の成長は、ある全体的な人格に関わる。——エマソン「大霊」

臨床教育学講座で語られる一つのキーワードは「変容」である。そこには多様な意味がこめられ、一人一人の研究においてその言葉がもつ重みも異なっている。また「臨床教育学」という領域そのものが、どこかその内外の境界を特定しえないあいまいさを秘めて動き続ける学問であり、それゆえに一人ひとりがフロンティアに立つことを求められる。私自身、5年前に外から着任して以来、この講座とそれを支える人々が備える発想の柔軟さと堅固さ、そして異人を受け入れるホスピタリティの精神から（ある意味でたえず外部者の視点をもって）多くを学んできた。「変容」の一つの側面はこの境界の流動性にあるように思われる。

このたび2年ぶりに『臨床教育人間学』9号が発行されることになった。2007年4月から2008年12月までの間に、臨床教育学講座はいくつかの節目を経て変容の歩みを辿ってきた。まず第一に、2007年10月に、同講座の臨床教育学ご担当の教員として西平直教授をお迎えした。同教授のご着任によって講座を支える人々の層にいっそうの厚みができ外への経路が開け、また内には異なるベクトルをもつ思想の潮流が生まれた。第二に、矢野智司教授の新著『贈与と交換の教育学——漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』（東京大学出版会）が2008年2月に刊行された。同著は、矢野教授の学位論文を基に執筆された思想の集大成とも言え、臨床教育学講座の歴史を刻む大きな転機と言える。その他、講座大学院生の出版物としては、*Educational Studies in Japan* 第2号に高柳充利“Transforming the Profession of Teaching in a Changing Society: Teaching as Philosophical Inquiry and Stanley Cavell’s *The Senses of Walden*”が、関西教育学会研究紀要第7号に宮崎康子「G. バタイユにおける『遊び』理解から見る幼児教育——遊びを遊ばせることは可能か——」が、京都大学大学院教育学研究科紀要第54号に池田華子「シモーヌ・ヴェイユにおける『メタクシュ』のはたらき：『関係』概念の捉えなおし」が発表された。

さらにこの期間には、臨床教育学講座の変容を学際的・国際的に促すことになる二つの大きな国際会議が開催された。一つ目は、2008年3月25日－26日に、イギリスのロンドン大学教育研究所にて開催された、同研究所と京都大学大学院教育学研究科の第一回国際会議“The Self, the Other and Language: Dialogue between philosophy, psychology and comparative education”（京都大学グローバルCOE／大学院GP共催）である。ここに、臨床教育学講座の教員1名および大学院生6名も参加した。講座の大学院生、講座関係者の協力を得て齋藤直子が翻訳出版予定であるロンドン大学教育研究所ポール・スタンディッシュ教授の著書 *Beyond the Self: Wittgenstein, Heidegger and the Limits of Language*. (Aldershot, Ashgate Publishing Group, 1992) の改訂新版（最近の諸論文を含む）に基づき、まず同教授と齋藤が共同基調発表を行った。講座の大学院生はこの基調発表を受ける形で各々主題を絞り英語で発表を行い、これに対して組になったロンドン側の大学院生の応答発表を受けた。これは、大学院生が自分の研究を一方的に語るのではなく、他者の思想と対話させる中で開陳し、しかもそれを英語という外国語で伝え、かつ臨床教育学講座外の外国の研究者の批評に徹底してさらすという、何重の意味でも試練に満ちた経験であった。さらに、この企画それ自体が、臨床教育学、教育哲学という思想研究の学問領域のみならず、心理学、比較教育学の研究者の発表と「自己・他者・言語」という共通の主題のもとに間接、直接に対話するという学際的交流の試みでもあった。本号の「特集：京都大学大学院教育学研究科・ロンドン大学教育研究所第一回国際会議」は、臨床教育学講座を内でまた外で支える人々によって生み出された、変容の経験の記録でもある。特集に掲載されているイギリス側、日本側の諸論文は本国際会議で発表されたものに基づいてグローバルCOEの報告書 *Proceedings of the International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University (Japan) and the Institute of Education, University of London (UK) The Self, the Other and Language: Dialogue between Philosophy, Psychology and Comparative Education*. (Global COE, Kyoto University, 2009) に掲載された諸論文を初出とし、一部のものは部分的な改訂が施されている。

この国際会議の企画、準備、運営については、スタンディッシュ教授に、イギリス側参加者の人選、プログラムの構成、日本側学生発表の英語指導や研究についての事前事後の個別指導、ロンドン大学教育研究所での会議運営などすべての場面において、多大なご尽力とご協力をいただいた。また同教授には、2008年12月6日（土）、7日（日）、13日（土）に京都大学教育学研究科「国際フロンティアC」の集中講義「Therapy of Education」（教育に

セラピーを与えること／教育を通してセラピーをすること）をご開講いただいた。臨床教育学講座の大学院生、同講座で卒論を執筆した学部生、他講座の大学院生や、他機関の研究員が参加し、言語との関わりを通じて自己変容と他者へ開かれること、読むこと、書くこと、死との関わり、などのテーマを軸に教育の再生を考えるという、密度の濃い英語による授業が行われた。ロンドン大学教育研究所での国際会議を学際的・国際的交流の名にふさわしいものとして実現していただけたこと、そして臨床教育学講座の大学院生が今後国際的な場面で活躍してゆく可能性を多様な形で開き続けて下さっていることに、この場を借りてスタンディッシュ教授に深く謝意を表させていただきたい。

臨床教育学講座を支える人々にとって、もう一つ、大きな変容を経験することになったものは、2008年8月9日－12日、京都大学で開催された、International Network of Philosophers of Education (INPE) の第11回大会（矢野智司教授実行委員長、齋藤直子事務局長）である。テーマは「教育と多文化理解」であり、世界各国から170人近くの人々が京都の地に集う大きな国際交流の場であった。この大会がアジアで開催されたのも日本で開催されたのも、これが最初であり、おそらく最後になるであろう。この国際会議においても、臨床教育学講座の教員、大学院生が英語による個人およびグループ発表を英語で行った。しかしこうした学術的な経験以上に、同講座が一丸となって、この会議を共にプロデュースしたことは、異なる思想背景を携えた異文化の他者との交流を通じた広義の自己変容の経験であり、臨床教育学講座にまたひとつ新たな歩みを生むできごとであったように思う。事務局のスタッフとしてこの会議を支え、外国からの客人を様々な企画で歓待することを可能にしてくれた大学院生諸氏には、この場を借りて改めて感謝申し上げたい。

これらの国際交流の経験を通じ、国際会議はその場限りのイベントではなく、大学の授業と連携しながら、継続的な教育の流れを創るものである必要性を感じている。2008年前期の大学院ゼミ「臨床教育人間学演習Ⅰ」では、3月のロンドン大学教育研究所での国際会議での経験と反省をふまえて翌年の企画へと発展させ、また INPE の国際会議につなげるために、英語による研究発表のゼミを初めて取り入れた。これは自らの思想を外国語で「翻訳」し他者に伝達する過程において、言語と自己の二重性を行き来しうような思考・執筆・応答様式の訓練を行なうことを目指したものである。外国語での発表はたんに日本語での発想を異言語に置き換えればよいだけのものではない。豊かな語学力は、自らの思想の独自性を維持しつつも、それを話がわかる人々の間のモノローグにとどめることなく、発想を異にする他者との対話の場に乘せて伝えることができる力量にひとえにかかっている。そのために

は、語学能力を高めることはもちろんのこと、国際学会という場で質疑応答に対応し、他者の論考を的確にレビューできる能力の育成が必要である。本号の特集は、そのような願いも込めて企画された。

本号には、講座の大学院生、卒業生らの日本語の論文も掲載されている。言語の差異を超え、境界を超えて動き続けるホスピタリティに満ちた学問的対話の場が、本誌を通じて広がれば幸いである。

2009年3月13日

齋藤直子

